

# 『夜寝覚物語』の構造

## ——『狭衣物語』との関わり——

小田成江

### 一 はじめに

かつて、『夜寝覚物語』の改作の構想には『狭衣物語』が関与しているということを論じた（『國文学』第九十三・九十四号）が、本稿では構想の根幹に大きく関わるものではないものの、物語の構造上見逃すことのできない『狭衣物語』の影響について考察してみたい。

一つ目は、原作『夜の寝覚』には、おそらく登場しなかったであろう人物が新たに改作本に登場させられているという点についての考察であり、二つ目は、原作の結末を大きく改変した改作本の結末部に関与する箇所についての考察である。周知のように現存する原作『夜の寝覚』には中間と末尾に欠巻があるため、その箇所の詳細は不明であり、改作本がその不明箇所の

内容を推測する手掛りとなっている。これから考察していくこの二点は、原作の中間欠巻部の内容に該当する箇所であり、『狭衣物語』の強い影響下に成立した内容であるとすれば、原作にはそれらが記述されていなかった可能性が高くなるのである。従ってこの考察は、原作の中間欠巻部の姿を推測するための一助となるのではないかと考えている。

### 二 原作に登場しない人物——中務宮の姫君

原作にも登場する人物である女一の宮は、改作目的からすれば物語から消去しても構わないのに、残しておいて齋院とすることで男主人公との結婚を回避させたという改変について、かつて次のように論じたことがあった。<sup>1</sup>

改作者が、女一の宮を齋院にしたのは、女主人公が男主人公と仲睦まじい夫婦になるという幸福な結末にするための改変であつたと同時に、神事関連の歌を創作してみるという目的があつたとみることができ、その背景には「狭衣」の源氏の宮と神事関連の歌が大きく影響していたはずだ、というものである。

さて、今回考察するのは、この女一の宮が、「狭衣」に倣つて神事関連の歌を創作してみることが目的のために改作本中に残されたのだということを表付けるかのように、原作中間欠巻部に該当する改作本巻三の中にある人物が登場させられているという点についてである。その人物とは、女主人公が老閨白と結婚してしまい、男主人公が心の空白を埋めるために交渉を持つた中務宮の姫君である。この姫君の人物造型について、石川徹氏は「源氏」の末摘花の模倣とし、永井和子氏はむしろ近江君を想起させるとするのだが、この姫君についての本文を引用してみよう。

### 改作「寝覚」巻三

i 中務の宮の、さきの齋宮の御腹に、限りなくいつき給ひし御女、かたちなど名高うきこえ給ひしを、親王失せ給ひて

のち、宮のうちは蓬律のみ茂りて、人の出で入ることも絶

えゆき、もの心細くておはするを、中宮聞こしめして、「女

はらからもなくて、つれづれなるに」とて、懇ろにきこえ給へば、母宮、乳母なども喜びて、御返事などあるに、やがて御装束、人々の料まで、こちたきまでおほしめし寄りければ、まかで散りし女房の中に、時々参り通ふを尋ね寄せて、仕立てて渡し給へり。(中略)(男主人公が)内より出で給へるに、先々御答へきこえし女房は、まかでたるほどにて、「さばかり恥づかしげに、やむごとなき御答へきこえさせん、かたはらいたかるべきこと。宮に、かくておはしまさん人の、この殿をさし放ちきこえ給はんは、いと便なかりなん」ときこゆるぞ、いと高く作りたる言葉なる。口々に、いみじくそそのかされて、さらばとおほしたるも、いと重らかにあらぬ御心にや。あざり出で給ふ衣の音なひ心にきき、立ち寄り馴るる心ばへ、折ふしをかしうおほすに、限りなき人と言ひながら、所につけ折に従ひて、身をも心ともち給へるにや、悪しかるべうもなからんとおぼすほどに、(中略)すべり入り給ひぬるに、御容貌、有様いみじうすぐれ給へるが見過ぐしがたくて(中略)手当たりささやかに、髪いとうるはしくて、こちたからぬ程なるべし。(巻三 四六一から四六三頁)

ii 夜更けて立ち寄り給へるに、さる心地しける気色あまたそ

よめきて、わざと忍ばぬ気色、いみじうかたはらいたう、  
苦しく見ゆ。「涙に沈みて思ひ嘆き、わりなうもて隠し忍び  
給ひつつあらましかば、いかにあはれならまし。すべて輕  
かりけるよ」など思ひながら、いたう暗からぬ火影に見れ  
ば、いとふくらかに、愛敬づきたる容貌し給へり。(卷三  
四六五頁)

本文 i の傍線部「限りなくいつき給ひし御女」「親王失せ給ひ  
てのち、宮のうちには蓬葎のみ茂りて、人の出で入ることも絶え  
ゆき、もの心細くておはする」といった生い立ちや住環境につ  
いては、末摘花と似ている。また、別の場面では、姫君の歌に  
対して書きざまなど「すべてあてやかにあらぬ」(四六四頁)  
とあり、姫君が男主人公の従者に被け物をしようとして笑い者  
になる(四六五頁)というエピソードがある。それらは末摘花  
の歌を源氏が非難していたり、末摘花から贈られてきた源氏の  
正月用の晴れ着が失笑的になったりするといったエピソード  
と似ている。

ところが、i の「御容貌、有様いみじうすぐれ給へる」「手当  
たりささやかに、髪いとうるはしく」、ii の「いとふくらかに、  
愛敬づきたる容貌」というように、美しい容貌や髪は、末摘花  
よりも近江君に近いものであり、i の「いと重らかにあらぬ

御心にや」、ii の「すべて輕かりけるよ」などといった軽率な面  
も近江君に近い。

このように中務宮の姫君は、「源氏」に登場する二人の姫君の  
人物造型からの合成と見られる面を持つ。

ところで、ここで、久下裕利氏の興味深い次のような指摘に  
注目したい。氏は、「狭衣」の今姫君について、「源氏」の近江  
君の系譜につながる烏滸物語の要素をもつ人物で、今姫君とい  
う名称は「源氏」の近江君を対象化した呼び名であり、「狭衣」  
の今姫君も近江君にまつわる話の展開を予想させるという趣向  
があつたという。なるほど、両者ともに、容貌はよい方だが歌  
のまずさが非難されており、物語の中で笑いものになる存在で  
ある。確かに、「源氏」の近江君と「狭衣」の今姫君とは共通す  
る要素を持つていると言えよう。

そこで、改作「寝覚」の中務宮の姫君に、「源氏」からの視点  
ではなく、「狭衣」からの視点を導入してみるとどのようなこと  
が見えてくるか考えてみたい。この姫君は、父親が早くに亡く  
なつたため後ろ盾がないので、男主人公の姉である中宮が世  
話をする事になつて男主人公の目に止まるようになるのだが、  
女房たちの無作法さや姫君の性格の軽さが男主人公を幻滅させ  
てしまう。こういった人物を「狭衣」の中に探れば、今姫君が

まさにそういった人物として描かれているのが分かる。今姫君は、主人公の継母である洞院の上が引き取って世話をするが、主人公は、その女房達の無作法さや姫君の痴呆さに幻滅するという展開になっている。つまり、「狭衣」の今姫君と改作「寢覚」の中務宮の姫君とは、男主人公の血縁関係にある女性を引き取って世話をするものの、笑いものになる姫君、という共通点を持っており、中務宮の姫君の人物造型に「狭衣」の今姫君が影響していたと言えよう。となれば、改作「寢覚」の中務宮の姫君も、久下氏の言う、「源氏」の近江君、「狭衣」の今姫君という烏澹物語の系譜を引く人物として把握してよいということになる。

つまり、改作「寢覚」の中務宮の姫君は、末摘花、近江君、今姫君といった「源氏」「狭衣」の中の三人の姫君たちから合成されて作られた人物であり、中でも直接的には今姫君をモデルとしていると言えよう。

そして、この人物が後々物語に登場せず、ここだけで消えてしまうのは、原作には登場しなかった人物であったということが考えられる。それは、久下氏の次のような指摘から推察されるのである。

氏は、「源氏」の中で今姫君と呼ばれるのは、近江君と玉鬘で

あり、「狭衣」の今姫君が近江君の後身であった背景には、玉鬘の後身である源氏の宮があったという。「源氏」の近江君と玉鬘、「狭衣」の今姫君と源氏の宮、二つの物語の中でこれらの女性是对として造型されていた<sup>5)</sup>という。

となれば、改作「寢覚」で、女一の宮を「狭衣」の源氏の宮をモデルとして改変するのなら、その対として「狭衣」の今姫君をモデルとする人物が登場してしかるべきである。そう考えた改作者が、先に述べたような性質を有する中務宮の姫君という人物を作り出したのだと推察することは許されるのではないだろうか。原作には存在しなかった烏澹物語の系譜に連なる人物を改作者が独自に造型したのではないだろうか。そして、わざわざそのような人物が登場させたのは、女一の宮を物語から消去しないで改作本の中に登場させたのと同じ目的によるのではないかと考えられるのである。

或いはまた、原作にも登場していた人物であつて、それを今姫君をモデルとして改変したのだという考えも成り立たないこともない。諸資料内にも原作の現存部にも見かけられず、後々物語の中で重要な役割を果たすこともなかったらしいこの人物は本来なら改作時に消去されてもおかしくはない存在だから、原作にも登場していたとはあまり考えられないのだが、そ

れにしてもわざわざ残しておいたのだとすれば、その残しておいた目的は何なのか。それもやはり原作には登場していなかったと考えた場合と同じ目的によると考えられる。

そう考えたのは、鳥澁物語の系譜に連なる人物であるにもかかわらず、男主人公と中務宮の姫君との歌の贈答場面に「源氏」「花散里」の巻を踏んだと思われる情趣深い場面がみられることからの推論である。一体に、鳥澁物語の系譜に連なる人物である、「源氏」の近江君、「狭衣」の今姫君、さらに、中務宮の姫君造型に関わっていると思われる末摘花などは、みな歌の拙さが強調されている。ところが、改作「寢覚」の男主人公と歌の贈答をした中務宮の姫君の歌は拙いものではなかったのである。次に引用する場面を検討してみよう。

### 改作「寢覚」巻三

五月雨の晴れ間の月、さやかに澄み渡りたる夜、例の内より出で給へるに、(中略、男主人公が中務宮の姫君の許を訪れる)時鳥の鳴き渡るに、花橘の枝を折りて、もたまへるを差し入れて、

(男主人公) 過ぎやらでかくこそ来鳴け時鳥花橘の香をな  
つかしみ

と言ひも果て給はぬに、扇をさし出だして、この枝を待ち

取る気色にて、

(姫君) 時鳥花橘に語らふもうはの空なる心地のみして

とのたまふ。いといたにくからぬけはひなり。(巻三 四六

二頁)

右の場面の傍線部「いといたにくからぬけはひなり」を見れば、姫君の歌はまずは及第点を取ったということであろう。ここでは、中務宮の姫君が鳥澁物語の系譜から外れて、「五月雨の晴れ間の月夜」「時鳥の鳴き声」「橘の花」といった素材から醸し出される和歌的情調を背景にして、男君と艶なる歌のやり取りをする女君という役割を振り当てられている。つまり、改作者はこの和歌の場面を創出するために、中務宮の姫君を登場させたと言換えることができ、この人物を登場させた目的はここにあったのだと言えるのではないだろうか。そしてこの場面は、当然のことながら、「源氏」「花散里」の巻を踏まえたものであろう。

「源氏」「花散里」の巻では、光源氏が「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に」麗景殿の女御の邸に向かう。途中、中川のあたりで「郭公」が鳴き渡り、女御の邸では「二十日の月さし出づるほどに」「近き橘の薫りなつかしくにほひて」やがて、さきほどの「郭公」がやってきて鳴くと、「艶なる」情調が醸し出

される。そして、光源氏が次の歌を詠む。

〔源氏〕 橘の香をなつかしみ郭公花散里をたづねてぞとふ  
女御の歌は次のようなものである。

〔女御〕 人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとな  
りけれ

右の源氏と女御の歌の中の点線部「橘の香をなつかしみ郭公」や「橘の花」という表現は、改作「寢覚」の男主人公の歌の点線部「時鳥花橘の香をなつかしみ」という表現と一致している。歌が詠まれた背景と違い、詠まれた歌と違い、「源氏」と改作「寢覚」は非常によく似ている。恐らく、改作者は「源氏」「花散里」の巻のこの場面を踏まえて先の引用場面を創作したのであろう。

以上のことから、改作者は「源氏」「花散里」の巻に倣って、五月雨の晴れ間の月夜、橘の花の香、時鳥の鳴き声、といったものを背景とした艶なる歌のやり取りの場面を自らも創作してみようとしたと考えられ、その目的のために中務宮の姫君を登場させたのだ、という推論が許されるのではなからうか。

先に、女一の宮が物語から消去されず、齋院になる女性として登場させられたのは、「狭衣」の源氏の宮の影響があり、彼女にまつわる神事関連の歌を詠むという目的のためであったとい

う推測をしたが、その点については、「狭衣」だけでなく、「源氏」「賢木」の巻にも見られる神事関連の歌の影響があったと言えるかもしれない。つまり、「源氏」「狭衣」という中世の和歌世界でもはやされた二大物語に、神事関連の歌が詠まれているということが、女一の宮造型に影響したと考えることができる。そしてその女一の宮の事例と並行して考えてみれば、中務宮の姫君造型に関しても次のようなことが言えるのではないだろうか。

即ち、中務宮の姫君には、「源氏」の近江君、「狭衣」の今姫君といった鳥辭物語の系譜を引く女性といった性格が見られることから、改作者はそういった性格の女性を登場させるという目的を持っていた。と同時に、「源氏」「花散里」の巻にあるような情緒深い場面を創作するために、男主人公と歌を詠み合う相手が必要でその役割を果たす人物を登場させるといふ目的も持っていた。その両方の目的のために登場させられたのが中務宮の姫君であったということである。

ところで、久下氏が、「狭衣」の源氏の宮と今姫君が一对として造型されていたと指摘したように、改作者も、改作「寢覚」の女一の宮と中務宮の姫君を一对として造型したのではないかと思われる。そのように考えられる根拠を次に挙げる改作本の

本文中に見てみたい。

改作「寢覚」巻三、女主人公が老閨白と結婚してしまったので、心の隙間を埋めるため男主人公は中務宮の姫君と交渉を持ち、それでも心満たされず、次には女一の宮との結婚を考え始める。それは世の噂にもなるが、やはり女主人公を忘れることができず文を送る。その文の中にあつた歌から以降の本文を次に引用する。

①(男主人公) 憂かりけり嘆きわびてはおのづから慰むやと

も思ふ心は

この度の御返事必ず」

とあるを、めづらしう見るは、我ながら心憂けれど、姫君のおとなび給はんまでは、この御ことづてをだにとおぼすにも、さばかりやむごとなくめづらしからん御ことのもの、いかならむと、ただならず、引きつくるはれて、

〔女主人公〕 かがたに分くる心のいかにして思ひ出でけ

るなさけなるらむ」

とばかり書きて遣はしたるを、なのめならんだにあるべし、まして見る世に類なき御手のにほひ、なかなか言ひつくしがたきにも、宮の姫君のことおほし出でて胸うち騒ぎ給ふ。

世の人の言ひ扱ふことを聞き給ひてけりと思ふにも涙袖に

余り、おもひねをこがしつ、もし慰むやおぼすことも

さまされて昼はひとりながめくらし、夜はつゆまどろまれ

給はねば夢にだに見えず。(四六八頁)

この場面の女主人公の歌の中の傍線部「かがたに分くる心」というのは、傍線部 i と ii から、中務宮の姫君と女一の宮という二人の女性に男主人公が心を分けているということの意味しており、それにもかかわらず今また私に情けをかけようとしているのはどういふつもりなのか、と皮肉つた内容の歌である。

この「かがたに分くる心」という表現を、中務宮の姫君と女一の宮に対して用いていることから、改作者は中務宮の姫君と女一の宮を対にして考えていたとみることができないだろうか。さらにそこから、改作者が、女一の宮を登場させるといふ構想を立てた際に、それと対になる人物中務宮の姫君を登場させるといふ構想も立てていたのではないかといふ推測がなされる。改作者の「狭衣」への過剰なまでの偏重を鑑みてみれば、源氏の宮に対する女一の宮という発想から、今姫君に対するXを発想するのは自然な流れであったのではなからうか。改作者の和歌詠作への強い欲求を満たすために「狭衣」からこれら二人の人物が造型されたのだと考えられるのである。

ところで、点線部「涙袖に余り、……夢にだに見えず」は、

いかにも中世的と思われるような対句表現がなされていて、原作にはなかった改作者独自の表現ではないかと思わせる様相を呈している。改作者は、原作にない独自の創作をした箇所はよく覚えていて、この場面を後に男主人公に反芻させているのである。それは、男主人公が女主人公と同居でき幸福感に浸っている時、過去の辛い日々を思い起こす場面があるが、そこで、この①の場面の男主人公の辛い心情が、女主人公の詠んだ歌の一部を引用しつつ、語られるという箇所である。もちろん、これは原作の筋を全く変えてしまった場面であるから、改作時の創作場面である。その本文を引用してみる。

② 齋院の御匣殿は、さてもおはしまさましかばと、ただならず思ひやりて、忘れ給ひぬらんとゆかしければ、

神かけて誓ひしことを櫛葉のさしもほどなく忘るべき  
かは

と書きて、櫛にさして木綿つけて参らせたる。引き開け給ひて、参るたびに「神の世の果つるまで、かく嘆き過ぐべき」と言ひたりしを思ひ出でたるなるべしと、ただならず目留まり給ひて、北の方に見せ奉り給へば、「うしろめたかりける御ちかごと」と、ほをまみ給へる美しさの、見れども飽く世なきに、「思ひわびて、この宮を思ひ寄りしに、

方々の御許しもありげなりしに、「分くる心のいかにして」とほのめかし給ひし御返りを見しに、心もかき乱りて何事もおぼえざりし」と語り出で給ひて、うち泣きて添ひ臥し給へるに、北の方もあはれに思ひ出で給ふ。(巻五 五三六頁)

御匣殿というのは、男主人公が女一の宮へ結婚を申し入れた時、仲立ちした女性である。その御匣殿が男主人公と女主人公の結婚を聞きつけて、女一の宮のことをもうお忘れですかという歌を送ってきた。男主人公は、それを女主人公に見せ、女一の宮へ結婚を申し入れた当時のことを思い出し、女主人公から「分くる心のいかにして」という返事をもらった時には、「心もかき乱りて何事もおぼえざりし」という状態であったと語る。この傍線部「分くる心のいかにして」という表現は、先の①の引用本文中の女主人公の歌の中にあつた表現であるから、女主人公から女一の宮との結婚を擲擻されたことを思い出したのである。そして、その歌を受け取った時の男主人公の点線部の心情「心もかき乱りて何事もおぼえざりし」という表現は、①の中の男主人公の点線部の心情「涙袖に余り、……夢にだに見えず」を受けての表現であろうと考えられる。

このように、改作者は、巻三の①の場面で、点線部の表現に



あつたような男主人公の辛い心情を、巻五の②の場面で、再び男主人公に思い出させているのだが、これは、自分が創作した箇所であるからよく記憶に残っていたためだと思われる。そして、巻五の②の男主人公と女主人公の幸福な夫婦像を描く場面で、過去の辛い日々の収束をはかるために伏線として機能させたのだと言えよう。

以上、まとめてみると、次のように結論付けることができる。女一の宮を改作本でも登場させ、男主人公との結婚が回避されるように齋院にしたという改変は、「狭衣」の源氏の宮をモデルとしたもので、その源氏の宮と対になっていた今姫君に当たる人物、中務宮の姫君の登場も促した。そして、それらの人物を登場させたのは、「狭衣」の神事関連の歌、「源氏」「花散里」の巻の時鳥の歌に影響されて、改作本の中にもそういった歌を詠み込もうとした改作者の意図があつたと考えられる。さらに、そのような改変を行うためになされた創作は結末部で収束させられていったと言えるだろう。

### 三 改作した結末部の伏線箇所について

原作の結末は末尾欠巻部中にあるため、詳細は分からないも

のの諸資料により推察されている。その結末部を改作本では男両主人公の幸せな夫婦同居生活へと収束してしまっているのだが、その幸せな場面は、「狭衣」をヒントに作り出されている。さらにその場面を作り出すことはあらかじめ計画されていて、それを伺わせる箇所が改作本巻二にあつた。

本稿では、その同じ結末部の場面にある内容が巻三に見られるエピソードを踏まえたものであることを指摘し、さらにそのエピソードには「狭衣」の影響が見られるという点について考察してみたい。

次に挙げるaがその結末部であるが、原作にはない改作時の創作箇所である。ちなみに、この場面には「狭衣」巻四、飛鳥井女君が産んだ娘が母の遺品を手渡される場面（後に挙げるb）からの影響があることをすでに指摘している。

a 改作「寝覚」巻五、男女両主人公がようやく同居することができ、仲睦まじく庭の桜を見ていた時、女主人公付きの女房、少将が、これまでに男君からきた手紙や石山で交換した小袖、その他の思い出の品を取り出し、往時を偲ぶという場面である。

御前の花盛りなるを見給ふとて、二所並びておはするに、少将御前に候ひて、昔物語し出たるに、殿「得がたかり

し御返りどもをば、一つも散らさず持ちたる」とて、取り出で給へるに、御心ざしの深さも言ふ方なく、涙ぐみ給ふに、少将また、「それよりの御文ども、みな取り置きで待る」とて取り出づるに、故殿の御もとへ渡し給ひし時、奉り給ひたりし御装束、扇、また石山にて着交へ給ひし御小袖を、返し参らせさせ給ひし中の御文などは、取り分きて取り出でたれば、北の方も今の心地して、我が書きすさみし「さのみやは、憂きにたへたる」とかや、長らふべくもなかりし心地、今のやうにおほえて石山の御小袖を召し寄せて見給ふにも、昔のこと、おほし残すこともなくてあはれなり。源氏の絵合はせは、我が嘆き過ぐし給ひし有様をこそ描かれけれ、これは、年ごろあはれなりしことどもを違へず見給ふ御心の中、いといみじ。姫君の御手習ひを、忍びて奉りしを取り出でたれば、また残るあはれあるべしとおほえず。(五三五頁)

次には、この場面に影響を与えた「狭衣」の本文を挙げてみる。(本文中の丸括弧は私に入れたものである。)

b「狭衣」巻四、飛鳥井女君の世話をした尼君の娘が、飛鳥井女君の娘に、産着と女君が残した絵日記を見せている所に不意に狭衣がやって来てその絵日記を見てしまふ場面。

常盤の尼君は、失せにしぞかし。心地限りにおほえける折、いと小さくをかしげなる小唐櫃を取り出でて、(尼君「これ、あなかしこ、おろかにしたまはで、忍びて宮(飛鳥井女君の娘、に御覽せさせたまへ。御産衣、昔の人(飛鳥井女君)の描きすさびたまへりし絵どもなどの、破り捨てむが惜しかりしどもを、取り置きたりしなり。(後略)」)とて、女に預けたりけるを、失せて四十九日など果てて参りたるに、(宮の)御前に人がちにもなければ(中略)御几帳近く引き寄せなどして、取り出でたり。(中略)我(ニ尼君の娘)も忍ばれず、悲しきこと多く、見どころある絵どももゆかしければ、かたはしづつ広ぐるほどに、音なくて、上(ニ狭衣)のふと渡らせたまへば、(尼君の娘がそれらを片付けてしまふが狭衣は宮の涙を見答める、という内容があり、その後狭衣は)ありつる小唐櫃引き寄せさせたまひて、「これや昔の跡ならむ。『見れば悲し』とかや、光源氏のとたまひけるものを」とはのたまはすれど、御覧するに、みづから描き集めたまへる絵どもなりけり。世になべての人のすることとも見えず、ありがたかりける筆の立ちどは、いづれも見どころありてめでたきなかに、我が世にありけることども、月日

たしかに記しつつ日記して、さるべき所々は絵に描きたまへり。

さらに、aの場面の波線部「姫君の御手習ひを、忍びて奉りし」の伏線となる箇所がある場面、改作「寝覚」巻三の場面を次に挙げてみる。

c改作「寝覚」巻三、女主人公が老閨白夫人となった後、男主人公に養育されている娘のもとに、これまで自分が書き集めた絵や「もてあそび物」を乳母を通して届けてやる。それらを受け取った娘は大喜びするが、実は母親がいたのだということを知り、母恋しいという文字を書いた。乳母がこっそりとその手習いを女主人公に届けたので、女主人公は何度もそれを見ては娘をしのぶ。男主人公は女主人公が恋しくなると娘の所に行き、母添わぬ娘を哀れむ。この場面の本文を次に挙げる。

御手づから昔今かき集め給ひたる絵ども、見どころあるもてあそび物を、心ことなるをば、この御料と置き給へるをとり集めて奉り給ふを、持ちて参りたれば、いみじう喜び給ふを、「これは母君の奉らせ給ふ」と申せば、「誰そ」と問ひ給ふを、こまかにきこえ知らせ奉れば、幼き御心にも、「かかりけることを知らざりけるよ」とて、う

ちしづまりてこの絵どもをご覧じける。その後は心にか  
け給ひて、もてあそび物、絵などご覧するさま、あはれ  
なり。いとけなき御手習ひにも「こひし」といふことを  
同じ上に書き置き給ふを、取りて、ことのありさま細か  
に書きて、忍びて参らせたるに、母君の御心のうちせん  
かたなし。(中略)ちりばかりのひまには取り出だして、  
忍びて見給ひけり。大将殿も、分く方なき御もの思ひの  
中にも、思ひ出で奉り給ひて恋しくおほせば、宵の間な  
ど渡り給ひて、見奉り給ふにも、かくのみ 母 添は  
ぬ人を見扱ふべきとこそ、かかりける契り心愛くて、御  
涙ぞ堰きかね給ふ。(四七四・四七五頁)

右のcの引用本文中の波線部「いとけなき御手習ひにも……  
忍びて参らせたる」を受けて、aの中の波線部「姫君の御手習  
ひを、忍びて奉りし」という表現があるのは明らかであろう。  
aでは、かつて男主人公が女主人公に送った数々の文を見て昔  
を偲んでいたが、次に取り出したのは女主人公に届けられた娘  
の手習いであつて、それを見れば「また残るあはれあるべしと  
もおほえず」という具合であつたのである。巻三のcの  
場面の波線部が、巻五のaの場面の波線部の伏線となつてい  
るのだが、このcの波線部に該当する内容は原作にもあつた可能

性はある。原作にもあったその内容を利用して巻五の a の場面の波線部を含む一文が創作されたということが考えられる。或いは、原作にはなく改作時の補入だとしても、その内容を結末部で利用して「また残るあはれあるべしともおぼえず」といったような「あはれ」な場面を強調する一文を入れたのであろう。

ところで、次に c の場面の三箇所の傍線部「御手づから昔今かき集め給ひたる絵ども」「うちしづまりてこの絵どもをご覧じける」「かくのみ母添はぬ人を見扱ふべき」についてみてみたい。この三箇所の傍線部から連想される場面が「狭衣」にある。先に挙げた b の場面である。「狭衣」の飛鳥井女君が生前描いていた絵が死後娘に手渡されるという話だが、その絵について、「狭衣」b では「昔の人の描きすぎたまへりし絵どもなど」や「みづから描き集めたまへる絵ども」というように表現されている。一方、改作「寝覚」c では女主人公から娘に渡される絵について、「御手づから昔今かき集め給ひたる絵ども」というように表現されている。この表現は「狭衣」の「みづから描き集めたまへる絵ども」と類似した表現になっている。そしてどちらの物語も母親が昔から絵を描いていて、描き集めていたその絵が、母の許で育てられなかった娘に届けられるという内容になっている。

「狭衣」の飛鳥井女君の話はとりわけ人々に人気のあった話で、彼女の絵日記についてもその哀話と共に広く知られていたであろう。そこで「寝覚」においても、実母と離され父に育てられる娘という共通点があるため、母親の描いた絵が娘に送られ、それを見た娘が母恋しい思いに涙するという哀話が創作されたのではないだろうか。そして、c の場面の「かくのみ母添はぬ人を見扱ふべき」という表現は、「狭衣」の飛鳥井女君の娘を意識したところから生まれた表現ではないだろうか。

そのような推測をもとに、ここに二つの仮説を立ててみる。一つは、原作では c の場面はあっても女主人公が娘に贈った品物の中に絵は含まれていなかったという見方である。その場合、女主人公から娘に何らかの贈り物はあったと思われるが、それに添えられた女主人公の文を娘が「うちしづまりてご覧じける」となっていて、「その後は心にかけて給ひて、もてあそび物、文などご覧するさま、あはれなり」と続いていく内容だったのでないだろうか。

今一つは、女主人公から娘に贈った品物の中に絵はあったが、それは女主人公自身が描いたものではなく、単に今までに収集していた絵であったという見方である。その場合、改作者は「狭衣」の b の場面を強く意識していたために、女主人公自身が描

いた絵としたのだと考えられる。

どちらもあくまでも仮説に過ぎず、原作はこの改作本のように、女主人公が描いた絵が「もてあそび物」と共に娘に届けられていたのかもしれない。しかし、改作「寝覚」のaの場面に、「狭衣」のbの場面が色濃く見え隠れしている現状を鑑みてみれば、改作「寝覚」のaの場面の伏線となつてゐるcの場面にも「狭衣」のbの場面が影響を及ぼしていると考えるのはさほど無理な見方でもないのではなからうか。

そして、女主人公が描いた絵が娘に贈られるという筋にしたことで、それを見て母を偲ぶ改作「寝覚」の「あはれ」な娘の姿に、「狭衣」の飛鳥井女君の娘の姿がオーバーラップされ、このcの場面での「あはれ」が強く印象付けられ、ひいては巻五の結末部aの場面において娘の手習いを見ての「あはれ」が際立つてくるという効果を生み出しているのではなからうか。

これまで見てきたように、改作者が「狭衣」に大きく寄り掛かりつつ原作「寝覚」を改作していることから、以上のように推察してみたわけだが、原作の中間欠巻部の詳細が判明しないままの単なる憶測にしかすぎないと、一笑に付されてしまう推論なのかもしれない。

#### 四 おわりに

『國文学』第九十三・九十四号(関西大学国文学会 平成二十一年・二十二年)に続いて、改作「寝覚」と「狭衣」との関わりをみてきた。本論「二 原作に登場しない人物―中務宮の姫君」は、もとは『國文学』第九十四号掲載の論文中に入れるはずのものだったが、紙面の都合上、別立てにした。これら一連の考察から、「夜寝覚物語」における「狭衣物語」の影響の強さが浮かび上がり、原作「夜の寝覚」と「狭衣物語」との融合の上にこの改作本「夜寝覚物語」が出来上がったかのような感を抱いた。そして、そのような改作をやつてのけた改作者の手腕にも感嘆した次第である。

#### 〔注〕

(1) 拙稿「夜寝覚物語」の改作方法について―改作の構想と「狭衣物語」―(『國文学』第九十四号(関西大学国文学会 平成二十二年三月))

(2) 石川徹(『源氏物語の影響を受けた平安後期の文学』『國語と国文学』昭和三十一年十月)。永井和子氏は、そのままではなくとも原作にも該当する人物はいたかもしれないと言う。

〔寝覚物語の研究〕(笠間書院 昭和四十三年七月) 第二章第二節「登場人物の改変」

(3) 本稿の改作本の本文引用は「鎌倉時代物語集成 第六巻」所収「夜寝覚物語」(笠間書院 平成五年五月)に拠り、私に漢字を当て仮名遣い、句読点を改めたものである。また、「狭衣物語」の本文引用は、新潮日本古典集成「狭衣物語」(上昭和六十年三月 下昭和六十一年六月)に拠る。尚、「狭衣物語」の伝本についての詳細な検討はしていない。必要な場合は古典集成と異なる系統の伝本を底本とする新編日本古典文学全集(小学館①平成十一年十一月・②同十三年十一月)を参照した。「源氏物語」の本文引用は新潮日本古典集成「源氏物語一二」(昭和五十七年)に拠る。本文中の傍線は私に拠る。

(4) 久下裕利著「狭衣物語の人物と方法」(新典社 平成四年一月)「三」「狭衣物語」の人物呼称について II 今姫君」

(5) 注(4)に同じ。

(6) 注(1)に同じ。

(7) 注(1)に同じ。

(8) 三谷栄一著「物語文学史論 新訂版」(有精堂 昭和四十年十月)「第三章 物語の崩壊」の「二 読者と改作」参照。

本稿は、平成十八年一月提出の修士論文の中の一部を手直したものであることをお断りしておきます。御指導を頂いた、田中登先生、山本登朗先生に深く感謝致します。

(おだ まさえ／大阪教育大学附属高等学校池田校舎講師)